

松田道雄著

女と自由と愛



岩波新書



松田道雄著

女と自由と愛

松田道雄

1908年茨城県に生まれる

1932年京都大学医学部卒業

職業—小児科医

著書—「私は赤ちゃん」「私は二歳」

「母親のための人生論」

「おやじ対こども」「私の読んだ本」

「自由を子どもに」「花洛」(以上岩波新書)

「育児の百科」

「在野の思想家たち」(いずれも岩波書店刊)

女と自由と愛

岩波新書(黄版) 74

1979年2月20日 第1刷発行 ©

1979年6月10日 第5刷発行

¥ 320

著 者 まつ だ みち お
松 田 道 雄

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社 製本・田中製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目
次



一信	はたらく女と専業主婦	1
二信	男と女	17
三信	解放と自立	33
四信	主婦の生きがい	51
五信	家庭の意味	69
六信	女だけの組合	85
七信	フリーセックス	101

目 次

八信	愛とラブ	119
九信	危険な関係	143
十信	恋愛と結婚	159
十一信	ハイミス	175
十二信	主婦のいらだち	195
	あとがき	213

一信 はたらく女と専業主婦

——さん

お手紙拝見しました。

K幼稚園の清野園長が、理事長から三月までにやめるようにいわれたんだそうですね。清野さんが数年来やっていた公開文化ゼミナールの熱心な聴講生だったあなたが腹をたてるのはごもっともです。

清野さんには私もおあいしたことがあるのです。「ベ平連」のできる少しまえだったと思います。戦争はよしてもらおうというので、政党と関係のないものばかりが、集まって相談をしたことがありました。学生を中心にしたわかい人の集まりに、ふたまわりほど年長と思



えるしとやかな方が、目だっていました。キリスト者の立場から参加したといわれました。独身で教会の幼稚園の園長さんをなさっているときいて、そんな方まで集まってくださったのか、と心強く思ったのでした。

清野さんとは、それ以来お目にかかっていません。でも幼稚園の父母の会の事業のひとつに公開文化ゼミナールをやっていたりしゃることは知っていました。そのゼミナールを教会のほうでいけないっていうんですってね。もっともそれは表面の理由で、清野さんの教育方針がこまるというんですから、まったく不都合な話だと思っています。

このあたりで、自由保育というか、カリキュラムをきめないでする保育をやっているのはK幼稚園だけです。あそこの園児は、ほんとうにのびのびとそだっています。

ところが、教会と同じ宗派の大学の付属小学校の入学試験にパスするような準備教育をしてほしいというのが教会のかんがえで、清野さんはそれをことわったというんですね。清野さんはもう二十年もいるんだから、教会の理事かと思ったら、そうじゃないんですって。だが命令一本でやめなければならぬ、というのもひどいことです。

あなたがいちばん怒っていられるのは、父母の会のなかにも清野さんにやめてもらいたい

という人たちがいて、その先頭にたっているのが、専業主婦である奥さんだということでした。

どうしてこう、家庭にいる主婦は料簡がせまいのかとあなたはいわれますが、それはどうでしょう。女性の敵は女性です、とあなたははげしい調子でかいていらっしゃる。たしかに、そうみえることはあります。

外で働いている女の人が、自分たちの労働の条件を少しでもよくしようと、力をあわせてたたかっているときに、女の幸福は家庭にあるなどという主婦がいて、敵にみえるでしょう。また一生をかけて職業をまもうとしていく女の人には、ほんの腰かけに、やすい賃金で働くパートタイマーの主婦は、スト破りにもみえるでしょう。

だが、私には外で働く女の人と、専業主婦とが、おたがいを理解していないことから、いろんなくいちがいができてくるように思えるのです。

外で働くということだけで、女の自立のためにたたかうことになるとも思いませんし、専業主婦になっているからといって、女の地位を低くしているとも思いません。外で働くか、家庭のなかの仕事に専心するかは、当人が環境と能力と好みにしたがって、自分の意志でき

めることです。

生活の環境がおそろしくわるくて、男であろうが、女であろうが、おなじように家の外でもうちでも働かねばならぬときは、男と女との分業はありえないでしょう。しかし、ある程度ゆたかな環境になると、男と女には、その生物的宿命をふくめての能力によって分業がおこります。その分業のどの部分をえらぶかは、それぞれの能力と風習とによってきまってくることでしょう。しかし、男女ともに、できるだけ選択の範囲をひろくできることが、市民的自由というものです。

外で働くことが、とりもなおさず自立であるのは、家庭で一方的に扶養されていた人間が扶養者から独立して職業につく場合にだけいえることです。

だが、それまでの扶養者からの独立が、そのまま人間的自立になるかどうかは、独立したあとの自由の度合によるものです。学校をでて外で働くことが、親からの独立であることから、家庭の外で働くことが自立のように思われがちです。

もうひとつ、男も女も家の外で働くことを人間としての資格のように思わせるのは、社会主義のかんがえ方の普及です。社会主義は心情的に有閑階級に反撥して生まれましたから、

「働かざるもの食うべからず」を信条にしています。この「働く」というときの労働が生産的労働にかたよってかんがえられています。そのかたよりは労働価値説のなかで、労働者の労働力の再生産に必要な価値のなかに、労働者の妻の家事労働を十分に評価しないことに由来します。

それはなくなった大熊信行氏がいわれたように、マルクス派が人間生産の場としての家庭をあまり重大にかんがえていないことからくるのでしょう。経済学的にそうふかくかんがえないにしても、専業主婦という女の生き方を是認すると反動的だというのはマルクスの影響です。社会主義を信じる人は外で働いている女の人を専業主婦よりも進歩的な自立した人間であるとし、専業主婦を生産に役立たない「働かざるもの」とみたくなるようです。

女の人が自分の仕事の場を環境にしたがってえらべるのが市民的自由だといいましたが、外で働く女の人にとって、結婚は男とくらべものにならないくらい、大きな環境の変化です。男女同権のかんがえからいうとたいへん不都合ですが、現実にはそんなのです。男は出産ができず、乳を分泌することもできないという生理的な宿命がからんでるので厄介ですが、私は結婚によって女が不利になることは改めるべきだと思っています。市民的自由に性別が

ないからです。だが、それを改めていくためには現実には現実には足をしっかりとふみしめねばなりません。

環境の変化としての結婚は、女の人の場合、自立の条件をつくるために十分おそく、結婚の相手をみつけるために十分早くなければなりません。自立できないで結婚してもだめ、自立しても相手がみつからなくてはだめということです。ですから、いまの男たちの好みという現実を見通して、結婚の時期をえらばないといけません。

あなたがはじめて訪ねてきてくださったとき、女がいつまでもひとりでいるのは感心しない、と私がいったのをおぼえていますか。

あなたのなさっている編集のお仕事は、相手にするのがそうわけのわからない人間でありませんし、書く人にヒントをだす点では創造的なところもあります。それに重労働というほどではありませんから、あなたが一生つづけてもいいとお思いになったのもふしぎでありません。げんに私のところにくる出版社の編集者のなかには中年の女の方も何人かいます。みんな有能です。そして大部分の人は結婚して家庭をもっています。もちろん編集の仕事を十年以上つづけていて独身の人もいるにはいますが、どこかあぶなっかしい感じがします。その

あぶなっかしさが魅力でもあって、仕事にプラスになっているような人もあります。そういう人で私がいちばん不安に思うのは、もう少し年をとって仕事をやめなければならないときがきたらどうするのだろうかということです。あなたが清野さんのことを人ごとでないように思われるのもその点だと思います。

いまどき老後の保障は絶対に大丈夫といえる人はいないでしょう。しかし、どんなにそがしい仕事をしていても、男ならみんな結婚し、子どもや孫をもつて晩年をむかえます。子どもや孫が保障をしてくれるとはかぎりませんが、独身者アパートでむかえる晩年にくらべればさびしくないでしょう。

ところが女は男とちがって、あまり仕事熱心だと結婚をするひまがなくなってしまうことがめずらしくありません。職に殉ずるということがありますが、これを実行しているのは女の人だけだと思いたくなります。

大病院には婦長という職があつて、おおぜいの看護婦をとりしきっています。経験をつんだ統率力のある婦長がいるからこそ、パートでやってくる医者をかかえた大病院が治療をつづけられるのです。この婦長に未婚の人がたいへんおおいのは洋の東西を問いません。病院

で医者をする仕事の手順を先の先まで読んで、医者がいくところいくところに道具をそろえている独身の婦長をみるたびに、私たち医者はこの人を人身御供にしていると、申しわけない気持ちになります。

保育園で園長をしている人のなかにも、そういう職に殉じている人を何人か知っています。子どもが好きで、思いやりがあつて、一日休むひまなしに働いて、下宿にかえってから本をよんで、日曜日には研究会にでてきて、デートをするひまもみつけれずに、結婚の機会をもたなかった人たちです。こんないい娘さんを結婚の相手にえらぶ男がいなかったのが腹立たしくなります。

そういう仕事熱心で結婚しなかった女の人をみすぎるほどみたので、私は二十五歳をこした女の人があまり仕事に熱心だと、ついおせっかいをしたくなるのです。仕事も大事だろうが、いいつれあいをみつけることのほうがもっと大事ですよといいたくなるのです。あなたの初対面の日に、いつまでもひとりでないようにいったのも、あなたがあまり仕事に熱心なのをみたからです。

あるときあなたは、なぜ人間は結婚しないといけないのかということをとらずねましたね。

私は誰にもいうことをあなたにいったのでした。

結婚して家庭をもつことは、それ自身が人生の目的といったものでありません。しかしいまの社会に生きていくためには、いちばん氣持を落ちつかせる生活の様式だと思うのです。適当な相手をみつけて結婚し、家庭をもち、子どもをそだてるというのは平凡なことです。私たちの祖先がずっとやってきたことだし、世間の大部分の人がやる俗なことです。

ある年齢をこしたら、自分とちがう性の人間と共同の生活をしたくなるというのは、人間が生物としてもっている性質ですから、それにしたがうのが自然でもあります。単なる欲求の充足なら、そのたびに相手をかえてもいいかもしれませんが、氣持が落ちつく点ではいっしょに住むほうがいいということです。

氣持が落ちつくということ、年齢のわかいときはあまり大事だと思わないものです。落ちつくと思うても、なかなか氣持が落ちついてくれないのが、わかい時代の特徴です。私も青年の時代はおこつてばかりいました。

自分が落ちつけないと、落ちついていない人間がばかにみえるものです。たしかに精神の不安定は人間の創造的な活動にはなくてはならぬものです。偉大な革命家とか、すぐ

れた芸術家とかは、おおく精神の安定を欠く人でした。だが革命家とか芸術家はただ精神が不安定であつたために偉大なのでありません。彼らは精神の不安定という起爆剤をつかつて、自分のなかにひそむ異様な能力を爆発させることのできた人です。爆発にたえるだけの強さをもっていたことが偉大だったので。ゴッホは自殺したから偉大だったのでなく、何度か自殺未遂をしながら、「ひまわり」や「いとすぎ」をかけたから偉大だったので。

わかい時代には精神の不安定によくたえられます。けれどもある程度年をとってくると、平和な市民として生きるのには、精神の安定が必要なのだということがわかってきます。からだのほうで精神をにないきれなくなることもありましようが、市民にとって日常というものがどんなに大事かということがわかってくるからだと思います。

孤高などということばは、ひびきはいいいけれども、一生を孤独ですごすのは容易ではありません。たくさんの老人が孤独にたえて生きていますが、孤独でなかった時代の思い出にさええられているのです。人生はふたりでないとささえきれないというのでなく、ふたりで生きているほうが払いのけやすい瑣事にみちているという意味です。

世の中では実にくだらないうことで他人との人間関係が險悪になることがおおいものです。

そんなとき家庭にかえって、「なによ、そんなつまらないこと」といつてくれる人がいると
いないとで精神の安定度がちがってきます。有為転変がならいのこの世ですから、ふかくか
んがえれば虚無にいきつくことになります。共同の生活のなかで、小さなことですったもん
だやっていたら、そうふかくかんがえずにすみませう。

外でくだらないことに気をくさらし、家にかえってきてひとりぼっちでいると、人生を異
常に深刻にかんがえてしんどくなります。独身の人はみんなそうやって生きているのですが、
それでも結婚のあてがあると、どんな相手とぶつかるだろうとか、あの人は自分に気があ
るのではなからうとか想像して、まぎれることもあるでしょう。しかし結婚のあてがなくな
ると、孤独では自分で自分の傷口をひろげるようなこともおこります。

人生はすべからくたのしくあるべきだというエピクロスの説に私は賛成ですから、精神安
定のよすがとして結婚をすすめるのです。

結婚となると不公平な話ですが、女には頃合というものがあります。そして女は自分より
年長の男と結婚するのが風習になっています。男が女にいばるといふ風習ができて、それを
自然にみせるのに男は年下の女と結婚するようになったのか、少しでもわかいほうが魅力的